

第6章

客観的な根拠を重視した 教育政策（EBPM）の推進

- ・ 倉吉市教育委員会
- ・ 倉吉市立打吹小学校
- ・ 倉吉市立西中学校
- ・ 岩美町教育委員会等

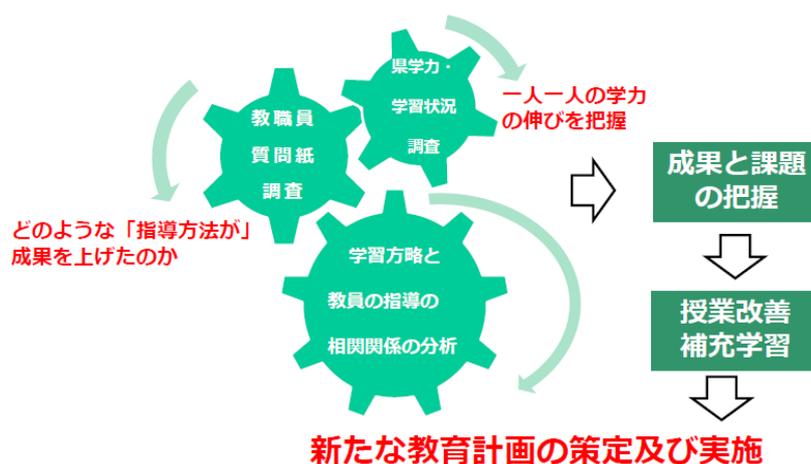
県教育委員会と倉吉市教育委員会及び岩美町教育委員会が共同で行っている実証研究の取組を紹介します。



客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM[※]）の推進について

※EBPM：Evidence Based Policy Making の略称で、エビデンス（客観的な根拠）に基づき、より実効性の高い政策を立案すること

とっとり学力・学習状況調査を全面実施して4年目を迎え、個人又は集団における学力の状況、学力を支える力である学習方略や非認知能力を経年で調査することで、学力レベルの伸びや非認知能力等の変化を見ることができるようになった。伸びに着目した取組に加え、令和5年度からは、伸びそのものの変化（伸びの伸び）も見取ることができるようになっている。ここで得られたデータをエビデンス（客観的な根拠）として活用し、教育政策に生かすことで、よりよい教育実践ができると考えている。しかし、教育データの活用については、全国的にも先行事例が少ないため、県教育委員会と倉吉市教育委員会及び岩美町教育委員会とが連携し、市町の学校のデータを基に共同で実証研究を行い、そこで得られた成果や好事例を県内の学校に発信していくこととする。



EBPMを推進することで、次の3つのような効果を期待している。

- ①優れた教師の経験や勘、そして匠の指導技術を、言語化・可視化・定量化するなどして、若手教師に効率的・効果的に伝承することができる。
- ②データによるエビデンスと教師の経験や勘を融合し、より効果の高い教育実践を行うことができる。
- ③今まで良いとされている取組、常識だと思われる取組について、その効果を検証することで、エビデンスに基づいたスクラップアンドビルドを推し進めることができる。

この3つの視点を持ちながら、指導・支援の在り方の見直しや校内研究等の効果検証を行い、次年度以降の教育政策に生かすことで、この調査結果をエビデンスとした効果の高い教育を推進したいと考えている。

今年度、倉吉市教育委員会や岩美町教育委員会と県教育委員会、そして文部科学省地方教育アドバイザーや鳥取県教育データ活用アドバイザーが一丸となって進めてきた実証研究について、今まで取り組んできたことや協議してきたこと、そして、得られた知見をまとめた。

1 研究推進の方法

- (1) 市町教育委員会と県教育委員会で実証研究チームを構成する。
- (2) テーマを設定する。
- (3) とっとり学力・学習状況調査の調査結果を分析する。
- (4) 学校を訪問し、聞き取り調査等を行う。
- (5) 調査や取組の内容をまとめる。
- (6) とっとり学力・学習状況調査報告書に調査結果や取組について掲載して周知を図る。

2 研究のサポート

文部科学省地方教育アドバイザー及び鳥取県教育データ活用アドバイザーから、データ分析の意義や方法、教育政策の検証等について指導・助言を受ける。

◇地方教育アドバイザー

文部科学省大臣官房人事課 人事企画官（併）副長 大江 耕太郎 氏

スポーツ庁健康スポーツ課 企画係長 藤野 萌子 氏

◇鳥取県教育データ活用アドバイザー

文部科学省大臣官房人事課 計画調整班 専門職 大井 康平 氏

3 学校の教育効果を図る視点

以下の3点に着目し、分析を進める。

- (1) 学力が伸びた児童生徒の割合・学力レベルの伸び
- (2) 非認知能力、学習方略
- (3) 児童生徒の学力が伸びた学級の割合

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進 【倉吉市教育委員会の取組】

1 はじめに

教育データを効果的に活用した教育施策を推進していくために、令和4年度より、倉吉市教育委員会と県教育委員会は、倉吉市内の学校のデータを基に共同で実証研究を行い、そこで得られた成果や好事例を県内の学校に発信することとしている。

2 研究テーマ

- ・小学校において、中学校でも学力を伸ばすための指導のポイントは何か。
(どのような指導が中学校で学力を伸ばし続けることにつながるか。)
- ・中学校において、学力を伸ばす学級経営・学年経営のポイントは何か。※学年主任の役割
(どのような学級経営・学年経営が学力を伸ばし続けることにつながるか。)

3 具体的取組の実際

(1) 倉吉市立小・中学校全校訪問について

倉吉市教育委員会と県教育委員会が倉吉市内の全学校の結果を把握し、各学校におけるとっとり学力・学習状況調査の結果活用状況や学校経営にどう生かしていくかについて各学校管理職及び担当者、倉吉市教育委員会、県教育委員会で協議した。

(2) とっとり学力・学習状況調査倉吉市プロジェクトについて

とっとり学力・学習状況調査の結果を活用した学校マネジメントについてプロジェクトメンバーを中心に共同研究を進めることを通して、とっとり学力・学習状況調査の学校マネジメントの資源としての可能性を探るとともに、その進捗状況及び成果等を普及し、各学校におけるマネジメント能力向上を目指すため令和5年度にプロジェクトを立ち上げた。

○倉吉市立打吹小学校

「学校マネジメントへの活用」

- ・児童の伸びについて追跡調査を行いながら、講じた教育施策の効果検証を行う。
- ・校内研究等の学校における教育施策の指標、改善の根拠とする。
- ・教職員の人材育成を図るために活用する。

○倉吉市立西中学校

「中学校における活用に係る好事例の創出」

- ・学年会議において、分析シート（学校用3）を活用し、学力を伸ばした生徒の特徴や教師の学力を伸ばしたと考えられる手立てについて協議する。
- ・不登校対策についての協議（「水曜会議」）において、帳票40を活用し、気になる生徒への手立てについて協議する。
- ・校内研究において、授業の質と非認知能力の向上を図るための視点や研究指標として活用する。

(3) スケジュール

日にち	内容	参加者
5月7日（火）	第1回チーム会議 ・現状についての情報共有 ・取組についての協議	・市教委 ・県教委 ・地方教育アドバイザー
5月14日（火）	倉吉市プロジェクトチーム会議 ・活用協力校の取組についての協議	・市教委 ・県教委 ・学校
5月22日（水）	第2回チーム会議兼地方教育アドバイザーによる市教委及び学校訪問 ・倉吉市教育委員会訪問 教育長との面談 倉吉市の取組等についての協議 ・打吹小学校訪問 授業参観、校長面談等	・市教委 ・県教委 ・学校 ・地方教育アドバイザー
6月4日（火）	倉吉市・岩美町活用協力校連携 ・活用協力校の校長による調査結果をもとにした対話	・市教委 ・町教委 ・県教委 ・学校

8月1日(木)	第3回チーム会議兼地方教育アドバイザーによる市教委訪問 ・全国学力・学習状況調査結果分析 ・全校訪問についての協議	・市教委 ・県教委 ・地方教育アドバイザー
10月18日(金)	第4回チーム会議 ・調査結果分析 ・学校支援についての協議	・市教委 ・県教委
11月、12月	倉吉市立小・中学校全校訪問 ・とっとり学力・学習状況調査の活用について協議	・市教委 ・県教委 ・学校
12月9日(月)	第5回チーム会議 ・研究の方向性について ・学校訪問について協議	・市教委 ・県教委 ・学校
12月12日(木)	第6回チーム会議兼地方教育アドバイザーによる市教委及び学校訪問 ・学校訪問 調査分析及び取組について ・倉吉市教育委員会への訪問 取組について協議	・市教委 ・県教委 ・学校 ・地方教育アドバイザー
12月16日(月)	倉吉市プロジェクトミーティング ・打吹小学校訪問 調査結果をもとにした協議 学校マネジメントへの活用についての協議	・市教委 ・県教委 ・学校
12月18日(水)	倉吉市プロジェクトミーティング ・西中学校訪問 調査結果をもとにした協議 校内研究への活用についての協議	・市教委 ・県教委 ・学校
1月17日(金)	倉吉市・岩美町活用協力校連携 ・活用協力校の校長による調査結果をもとにした対話	・市教委 ・県教委 ・学校

4 成果と課題

(1) 成果

- 地方教育アドバイザー、倉吉市教育委員会、県教育委員会が連携し、各学校を訪問することで、とっとり学力・学習状況調査の意義が浸透し、調査結果の分析をもとにした授業改善や校内研究等への活用が多く、多くの学校で実施されている。
- 倉吉市教育委員会と県教育委員会が共同で調査結果を分析することで、客観的に学校の状況を把握することができ、学校訪問の際に根拠をもとに学校と協議することにつながった。
- プロジェクトを立ち上げ、学校の取組について倉吉市教育委員会と鳥取県教育委員会が共同して考え、サポートすることで、次ページ以降で紹介する打吹小学校及び西中学校の取組に見られるようなとっとり学力・学習状況調査の調査結果の効果的活用につながった。

(2) 課題

- とっとり学力・学習状況調査は、年に1回の調査であることから、分析するだけの十分なデータとは言えない。そこで、学校への聞き取りや訪問を通して、2で示した研究テーマについての分析をさらに進め、研究結果やそこで得られた知見を周知することで、教育施策の立案や改善に活用できるようにしていきたい。
- 非認知能力や学習方略等に注目する意識が高まっている一方で、年に1回の調査では活用に限度があるため、令和7年2月に開発、配信した非認知能力等調査アプリ「見え～る」の効果的活用が必要である。

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進 【「とっとり学力・学習状況調査倉吉市プロジェクト」－倉吉市立打吹小学校の事例】

本プロジェクトにおいて、打吹小学校では学校長による「学校マネジメントへの活用」を主眼としながら、具体的には以下の3点を視点とした取組を進めている。

- (1) 児童の伸びについて追跡調査を行いながら、講じた教育施策の効果検証を行う。
- (2) 校内研究等の学校における教育施策の指標、改善の根拠とする。
- (3) 教職員の人材育成を図るために活用する。

本報告では、以下をテーマとして、特に(1)(2)に係る取組の一端を紹介する。

非認知能力の向上に向けた打吹小学校の歩みと足跡 —学校におけるEBPMの実際と可能性

1 はじめに

I R T (※) を基にしたとっとり学力・学習状況調査（以下、「とっとり学調」）は、他の調査にはない特徴や可能性を備えている。例えば、学力とそれを支える非認知能力（心）と学習方略（学び方）とを一体的に捉え、それらの伸びを追うことができる。そして、それらを子ども達一人一人（個の視点）、学級・学年や学校全体（集団の視点）という複数の視点から捉えることができる。とっとり学調が備えているこうした特徴を、研究推進を中核とした学校経営に活かしながら取り組んでいるのが、打吹小学校の事例である。同校ではさらに、とっとり学調だけでは対応できない部分を補完していくような試みにもいち早く着手した。

学校におけるEBPMの具体的な事例について、その基本的な考え方や取組の過程、今後の可能性等を紹介したい。

※ I R T (Item Response Theory) / 「項目反応理論」あるいは「項目応答理論」等と訳されるテスト理論

2 自校でつくるEBPMの基盤

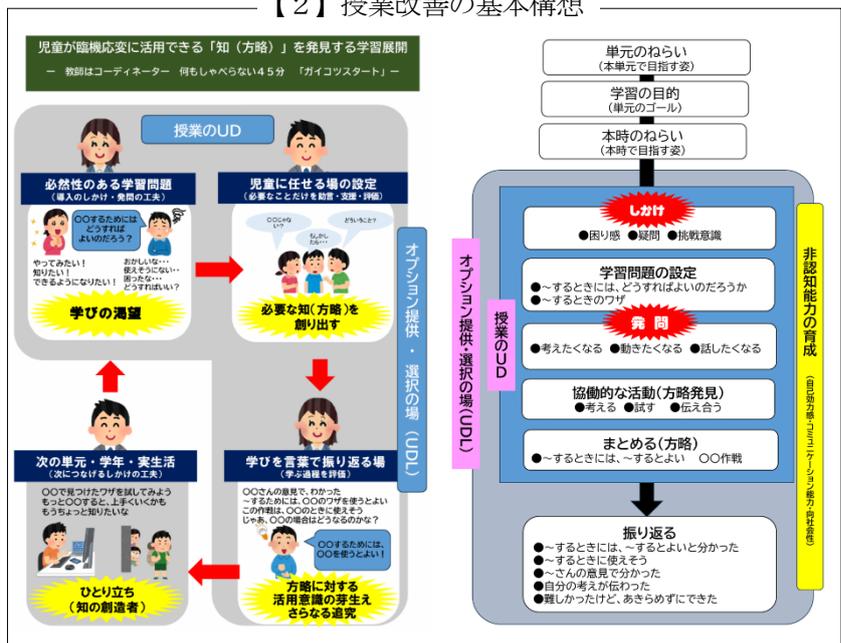
(1) 打吹小学校がめざすところ

打吹小学校では、主体的・対話的で深い学びを通して培った学び方を教室の中だけに留めることなく、自己の生き方へとつなげることができる子どもの育成をめざしており、これを「『ひとり立ち』する子ども（知の創造者）」と呼び、教育活動全体を通してその育成を構想している【1】。そのためには、自らの学びを駆使して、多様な他者と協働しながら課題解決を行っていく上で必要となる様々な「方略」（打吹小ではこれを「ワザ」と呼ぶ）の獲得と、自己効力感をはじめとした「非認知能力」の育成が必然のものとなる。プロジェクトを推進する上で、とっとり学調を活用しながら、令和6年度は特に「非認知能力の育成」を重点の一つとして様々な取組を行った【2】。

【1】 研究推進の基本構想



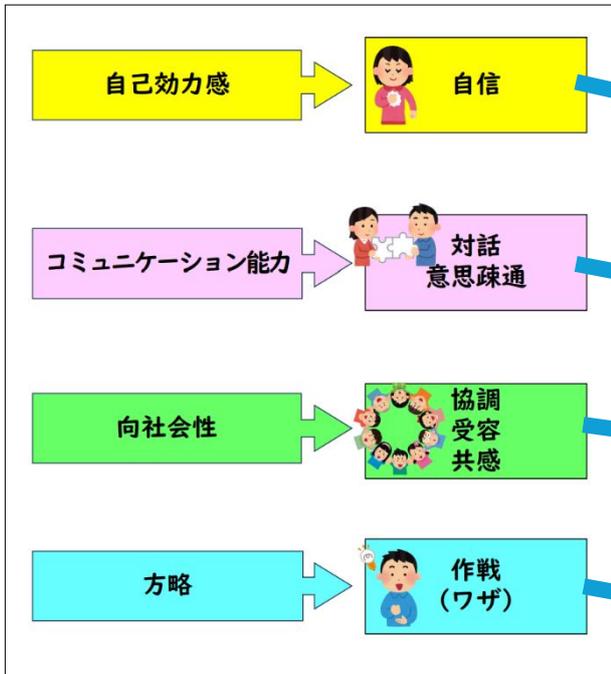
【2】 授業改善の基本構想



【2】学校が育てたい非認知能力・学習方略の具体化

打吹小学校は、旧成徳小学校と旧灘手小学校が統合して新設された学校である。自校の子ども達に育てたい力とはどのような力なのか。学校統合1年目における子ども達の姿や様々な取組等を振り返り、教職員による議論を経て、非認知能力と学習方略という視点から4つの力を選定した【3】。そして、この4つの力を具体的な子ども達の姿へと落とし込み、評価指標を設定した【4】。この指標は、子ども達の状況や変容を見取るための指標であると同時に、教職員が日々の授業においてめざすべき具体的な目標でもある。この評価指標を子ども達へ向けた言葉で各教室にも掲示し、校内での意識化・共有化を図った。

【3】打吹小学校が向上させたい力



【4】研究の評価指標

評価項目	
自己効力感 (自信)	① 「よーし、やるぞ。」という気持ちをもって活動に取り組んでいる
	② 少し難しくても、あきらめずに活動に取り組んでいる
	③ 先生や友だちからはげましてもらったり、認められたりすることがある
	④ 今日、学習したことが分かる
コミュニケーション (対話・意思疎通)	① 自分の思いや考えを、話したり書いたりして伝えようとしている
	② 友だちの話を聞いて、うなずいたり質問したりしている
協調・受容・共感 (向社会性)	① 友だちに質問したり相談し合ったりしながら、学習問題を解決しようとしている。
	② 自分とはちがう考えを聞いて、新しい考えや知識を増やしている
	③ 友だちが困っているとき、手伝ったり教えたりしている
方略(作戦・ワザ)	① 今日の学習で、何を解決すればよいか分かる
	② 前に学んだことを思い出しながら活動に取り組んでいる
	③ 学習問題を解決する方法をいくつか知っている
	④ 学習で発見した方法を他の教科や場面、家などで使っている

【3】学校独自の非認知能力の見取り

さらに、評価指標に呼応する形で児童向けのアンケートも作成した【5】。「学びの達人アンケート」として、年に複数回実施した。このアンケートは、学校がめざす具体的な学びの姿を子ども達に示すメッセージであると同時に、子ども達が自己の学びを振り返るためのツールとしても活用した。

【5】児童向けのアンケート

学びの達人アンケート		年 番 名 前			
	このアンケートは、ふだんの学習や生活場で、その時の様子や気持ちについてたずねるものです。当てはまるところに、1つ〇をしてください。	そうである	だいたいそうである	あまりそうではない	そうではない
自信	① 「よーし、やるぞ。」という気持ちをもって活動に取り組んでいる				
	② 少し難しくても、あきらめずに活動に取り組んでいる				
	③ 先生や友だちからはげましてもらったり、認められたりすることがある				
	④ 今日、学習したことが分かる				
伝え合い	① 自分の思いや考えを、話したり書いたりして伝えようとしている				
	② 友だちの話を聞いて、うなずいたり質問したりしている				
仲間	① 友だちに質問したり相談し合ったりしながら、学習問題を解決しようとしている。				
	② 自分とはちがう考えを聞いて、新しい考えや知識をふやしている				
	③ 友だちが困っているとき、手伝ったり教えたりしている				
作戦・ワザ	① 今日の学習で、何を解決すればよいか分かる				
	② 前に学んだことを思い出しながら活動に取り組んでいる				
	③ 学習問題を解決する方法をいくつか知っている				
	④ 学習で発見した方法を他の教科や場面、家などで使っている				

アンケート実施後は、各項目の結果を数値化し、教職員による分析・考察を行った。

【6】は、5月に行った分析・考察の際に活用したシートである。子ども達に育てたい非認知能力・学習方略の視点から得られた結果

(数値)をきっかけに、子ども達の日常の姿を根拠にすることで、数値と実態とを照合させながら議論する。「振り返り」と「今後の指針を手にする」とは、常にセットで存在するという考えのもと、教職員による議論から、次につながる指針を見出すことを試みた。

【6】教職員による分析・考察

児童アンケート 5月分析 ()年					
1 クラスの強み					
質問項目	非認知能力	4/5	5/5	6/5	7/5
少し難しくても、あきらめずに活動に取り組んでいる	自己効力感	6/14	39%	8/14	57%
2 クラスの課題					
質問項目	非認知能力	4/5	5/5	6/5	7/5
友だちの話を聞いて、うなずいたり質問したりしている	コミュニケーション	17%	52%	30%	0%
友だちに質問したり相談し合ったりしながら、学習問題を解決しようとしている	向社会性	26%	57%	17%	0%
3 課題項目の中で、否定的な回答をした児童					
うなずいたり、質問...					
質問したり、相談...					
解決...					
4 児童を「運転手」にするために、授業改善に必要なこと					
・ ストーリーをもとにする... 話しが面白くなる → リズムの補完					
・ 話し合いのツール... グラフボードではなく、ホワイトボード、黒板など					
・ ペアではなく3人組で... 図で話し合いがしやすい					
・ 発表することをめいめい... 発表は必ずしも必要ではない					

(4) 学習指導案への落とし込み

学習のねらいに迫ることと、非認知能力・学習方略の向上に迫ることは同一直線状にあるという考えのもと、学習指導案の中にも評価指標の項目を明記した【7】。これにより、授業場面において発揮させたい非認知能力・学習方略が明確となり、教師が意図をもって授業に臨めるようになった。

さらに、子ども達を「学びの主体」とするために、今年度は授業場面における「発問」と「しかけ」に焦点化した実践と検証を重ねた。

【7】 4年生国語科（令和6年度実施）学習指導案より

〔单元名「要約名人になろう」 教材名「未来につなぐ伝統工芸品」〕

	学習活動・児童の反応・手立て等	支援（・）と評価（◎）
13:40	<p>1 前時で行った「はじめ」の中心文を提示し、文字数を確認する。 ・全部で154字ある。 ・表紙に載せるには、まだ長い。</p> <p>2 教師のエラーモデルを提示した後、学習問題を設定する</p> <p>しかけ 自己効力感① 方略① 学習問題を設定する 「先生も120字以内に要約してみたんだけど、うまくいきませんでした。どうすればいいですか。」 ・127字の文、文末は敬体のままの文を提示する。</p> <p>関 条件に合わせて文章を短くまとめるワザ</p> <p>発問 「120字以内にするためには、どのようなワザを使うとよいですか。」</p> <p>3 グループで127字の文を120字にした後、そのワザを全体で共有する。</p> <p>手立て① コミュニケーション① 向社会的性① グループでの要約 ・3人グループで行う。 ・ロイロノートなどの思考ツールをグループで1つ活用させることで、互いに文章を読み合いながら、ワザの発見に関する活発な話し合いへとつなげる。</p>	<p>学校独自の評価指標の項目を明示 (学習指導案中のどこに設定しても可)</p> <p>・児童の困り感等や挑戦意識が生じたところで、本時の学習問題について考えるよう促す。</p> <p>・児童から挙がった言葉をもとに学習問題を設定する。</p> <p>全学年共通で、この時間に身に付ける方略を「ワザ」として共有</p> <p>・文末を変えただけでは120字以内にならないと気づいたところで、「言葉を削る」という発</p>

(5) 考察 —自校でつくるEBPMの基盤

「自校でも独自に非認知能力を追っていけないだろうか。」こうした思いから始まった挑戦により、独自に設定した非認知能力・学習方略に関わるデータ収集→分析・考察→取組・実践というプロセスを創出することができた。得られるデータの量や妥当性という面については、IRTを基にしたとっとり学調には到底かなわないが、それでも自校で創出したことのメリットは大きい。例えば、自校がめざすものや子どもの実態に合わせたものを設定できること、データ収集の時期や回数を自校で設定できること等、小回りの効く運用ができる。そして、全学年が共通して取り組める。これらは、とっとり学調だけでは対応できない部分でもある。とっとり学調の限界を把握した上で、足りない部分を埋めていく術をいち早く自校で創出したことの意義は大きい。強力な客観としてのとっとり学調のデータとそれを補完する学校独自の指標等とを組み合わせることにより、EBPMの基盤が校内に形づくられてきている。

また、非認知能力・学習方略は、教師が意図してしかけることにより、育てていくことができるものである。だからこそ、学習指導案に落とし込み、日々の授業で育成していく素地がつけられたことには大きな価値がある。ここまで紹介した個々の取組がさらに連動していくことで、評価指標に挙げられたような子どもの育ちが実現していくと考えられる。

3 学校におけるEBPMの実際① 【研究推進に生かす視点】

令和7年1月に行った校内研修では、「学びの達人アンケート」及び「とっとり学調（帳票40）」の結果分析を基に、3学期・次年度の研究推進や授業改善等における取組を構想した。ここでは、得られたデータを根拠に、どのように深掘りして取組の創出へつなげていったのか、その一端を紹介する。

(1) 「学びの達人アンケート」(自校作成アンケート)を活用した分析・考察

まず、アンケート1回目(5月)と2回目(12月)の結果(全校、学年ごと)を比較し、分析していく項目を2つに絞った。次に、その項目の数値を根拠に、5月よりも向上が見られた要因と向上が見られなかった要因についてそれぞれ考察し、どのような取組が今後必要になるのかを見出した。以下は、その流れと概要である。

「学びの達人アンケート」の結果を基に、分析する対象とした非認知能力・学習方略に関わる項目

【向社会性⑧】
自分とはちがう考えを聞いて、
新しい考えや知識を増やしている

【方略⑬】
学習で発見した方法を
他の教科や場面、家などで使っている

伸びた要因について考察

伸びが見られなかった要因について考察

向社会性 ⑧自分とはちがう考えを聞いて、新しい考えや知識を増やしている

5月	肯定的		否定的	
	そうである	だいたいそうである	あまりそうではない	そうではない
全校	51%	38%	10%	1%
1年	64%	27%	9%	0%
2年	74%	16%	5%	5%
3年	48%	38%	14%	0%
4年	35%	48%	17%	0%
5年	46%	43%	11%	0%
6年	46%	50%	4%	0%

12月

向社会	そうである	だいたいそうである	あまりそうではない	そうではない
	全校	43%	48%	9%
1年	55%	41%	5%	0%
2年	43%	39%	17%	0%
3年	33%	52%	14%	0%
4年	35%	61%	4%	0%
5年	44%	41%	15%	0%
6年	46%	54%	0%	0%

【5月より向上した要因は?】

- ・自分の思いや考えを伝えてくれるから、聞く側も(⑤)開けるようになった。
- ・そのような場を意識的に設定している(教員の方)。
- ・同じ考えの人がいると安心して、発言できる。
- ・先生の活動の重視
- ・友だちの意見を聞き入れる。

方略 ⑬学習で発見した方法を他の教科や場面、家などで使っている

5月	肯定的		否定的	
	そうである	だいたいそうである	あまりそうではない	そうではない
全校	33%	47%	15%	5%
1年	59%	32%	9%	0%
2年	47%	32%	11%	11%
3年	38%	43%	5%	14%
4年	17%	61%	22%	0%
5年	21%	50%	21%	7%
6年	21%	58%	21%	0%

12月

方略	そうである	だいたいそうである	あまりそうではない	そうではない
	全校	32%	46%	20%
1年	68%	27%	5%	0%
2年	35%	48%	9%	9%
3年	29%	52%	19%	0%
4年	13%	74%	13%	0%
5年	19%	33%	48%	0%
6年	33%	46%	21%	0%

【向上しない要因は?】

- ・子どもが、生活中で学ばせてあげてくれている場面を伝えてあげていく。意識をできるよりに声をかけていく。ことができていない。
- ・これができていない学年は1年、2年、教員の方の⑬のことが課題。
- ・見つけた方略を、目に見える形で残していく。(〇〇作成)
- ・ことが、学ばせてくれない。
- ・「こうしたらいい」「したら...」なロゼンブロッグのような学習設定がなかなかできていない。(アンケート?)

両項目を関連付けて、さらなる考察へ

【向社会性】「自分とはちがう考えを聞いて、新しい考えや知識を増やしている」では成果が見られるが、それが【方略】「学習で発見した方法を他の教科や場面、家などで使っている」ことには十分につながっていないのではないかと。その要因は何だろう。

つまり...
打吹小学校の児童が、自分とはちがう考えを聞いて、新しい考えや知識を増やしているのは学習で発見した方法を他の教科や場面、家などで使おうとしないのは...

- ・学習したことを活用、応用する場や時間が足りない。
- ・「いろいろな場で使える」ということに気づけるようにできていない。
- ・ふり返りで、「他の場面にも使えよう」という考えを引き出せていない。
- ・学習内容を覚えるだけで時間が、は...は...は...に足りる。
- ・いろいろなパターンの問題にあたることできていない。

では、どうすればよいのだろう... ⇒ (3) へつづく

データ(数値化されたアンケート結果)から、掘り下げる項目を重点化し、全員で分析・考察を行い議論することで、さらなる疑問や課題を見出していった。こうして少しずつではあったが、核心へと迫っていった。様々な分析方法があるが、どのような分析を行うと、課題を明確に捉え共有し合えるものになるのか。この進め方は、それを考える一つのヒントになる。

(2) 「とっとり学調(帳票40)」を活用した分析・考察

校内研修ではさらにとっとり学調のデータ(帳票40)を根拠に分析・考察を行うことで、3学期の指導の力を明確にした。ここで見出したことを3学期にすぐに実行できるように、原則として現担任と前担任が一緒になるようグループ編成を行った。個々の児童の様子や変容をよく知る両者がグループの中核になることで、児童の姿を根拠にした効果的な取組等を考えることにつながり、分析の精度が上がった。

右は、この時にまとめた、ある学年の分析シートである。自校作成アンケートでも、とっとり学調(帳票40)でも、データと子どもの姿をつなげ解釈しながら、成果や課題、今後の取組等を出し合うというプロセスは変わらない。

とっとり学力・学習状況調査の分析シート 【「帳票40」を基にした分析】

「学級の取り組み」

	学力レベル		主体的・対話的で深い学びの実現	学習方略			非認知能力		
	国語	算数		発見的	プランニング	作業	認知的	努力調整	自己効力感
本学級	6C								
倉吉市	6C								
県	6C	4A	3.8	3.4	3.5	3.5	3.8	3.9	3.5

○担任の分析 (自分の何が足りなかったのか。要因は、有効的だったところは。)

- ・思考場面は、国語のツール... 個々の配慮が不足 → 選択肢がなかった
- ・(算)では、困り感を発しにくい雰囲気(なごみ)を醸成。
- ・グループ活動等で、女子に正確を言わせると引いてしま。

○改善プラン (○やってみよう △やめてみよう)

- ・選択肢
- ・学習問題(方略を意識) ⇒ くり返し説明
- ・グループ編成: 男子・女子の関わり、受容・共感、うなずき、リアクション
- ・ノート展: 演じる、具体的に評価

(3) さらにつながるプロセス —この日の校内研修を振り返って

以上、1月の校内研修の概要を紹介したが、この日の研修では「3学期に努力していくこと」として、各自が目標設定を行うことができた。また、分析の過程で教職員から、「子ども達一人一人の学習方略の伸びに対して、学力がそれに見合った十分な伸びを示していないのはなぜだろうか」という疑問が出てきた。そして、先の「学びの達人アンケート」で分析した2つの視点「向社会性」「方略」の成果と課題に、そのヒントがありそうだということにたどり着いた。こうして、教職員が行った分析・考察をさらなる根拠にして、新たに追究していく以下のような問いが生まれた。

「学んだ知識(方略)を意識し、駆使することのできる子を育てるためには、どのような取組をすればよいのだろう」

教職員がたどり着いたこの重要な問いに対して、まずは各自が自分なりの仮説を考え、後日開催される「研究のまとめ」の研修会でそれを提案し合うことになった。

このように、教職員の議論によって問いが洗練され、さらに追究していく流れが生まれた。

以下は、この日の職員研修を振り返って、研究主任から教職員へ発信されたメッセージである。研修で何が議論され、どのような方向に向かうことになったのか、現場の声と手応えを読み取ることができる。

・・・(前略)・・・

そのような意味において、始業式前日の分析会はとても大事な時間となりました。休み明けにも関わらず、先生方の思考がフル回転しておられる様子がうかがえました。「知識を広げようとしている」「方略活用が見られない」と、2つの結果に絞って考察していきましたが、様々な視点と関連付けることで授業づくりの課題が少しずつ浮き上がってきました。子どもたちに必要なのは、「知識(方略)を増やすこと」だけではありません。「学んだ知を結集し、そこから新たな課題に対して獲得した知を駆使して使える力」が必要なのです。だからこそ、「～するときには、どうすればよいのだろう。」という問いを抱く「クセ」をつけていくことが大切だと考えます。また、発見した方略について「これは使える!」と、よさを実感する場を単元のどこかで仕組まなければ、子どもたちは実生活で使おうとはしません。

今回の分析を通して、方略を意識した学習展開の重要性に気づかれた先生方が多くありました。・・・(後略)・・・

[打吹小学校 研究推進だより(令和7年1月16日号)より抜粋]

(4) 考察 —学校におけるEBPMの実際①【研究推進に生かす視点】

ここまで、自校アンケートととっとり学調(帳票40)を活用して得られたデータを根拠に、そこからどのように深掘りして取組の創出へつなげていくのか、途中経過ではあるがその一端を紹介した。分析する視点を焦点化したり、関連付けたりしながら議論し合うことで、徐々に教職員が向かう方向性を明確にしていた一例である。

データ(数値)は重要なきっかけを示してくれるが、答えを示してくれるものではない。だからこそ、データ(数値)の背景にある子どもや教師の営みを振り返り、データと実際とを往還・照合させながら、今後に向けて何らかの仮説を立てて取り組んでいくしかないのである。

その意味において、安易に答えを求めようとするのではなく、教職員の中から課題解決に向かう動きや機運が徐々に生まれてきたプロセスにこそ、大きな価値があったのだと考える。もちろんある程度の時間と労力は要するが、教職員一丸となってこうしたプロセスを積み重ねることが、学校組織及び教職員一人一人の力量を上げることにつながっていると考えられる。

4 学校におけるEBPMの実際②【個の支援に生かす視点】

※本内容について Web 版では割愛します。

5 終わりに —現場の教職員にしかできないこと

本報告は、打吹小学校の取組の一部分を断片的に取り出したものに過ぎない。報告書にあるほどスムーズに取組が進んでいたわけではなく、実際には、教職員による様々な思いや願い、努力や苦労があり、校内で少しずつ共通理解を図りながら、試行錯誤を経て形となってきたものである。また、教職員がこうした様々な取組を重ねてきた裏には、校長による教職員への戦略的な関わりやアプローチがあったことも大きい。本報告の内容は、報告書では見えない数々の努力や苦労の賜物であり、今後もさらに形づくられていくものであることを伝えておきたい。

終わりに、EBPMにつながる校長のメッセージを紹介する。

「数字」は有能であるがすべてを語ることはできない。同様に私たちの「感触」は多くの場合、的を外さないが、やはりすべてを語ることはできない。私たち教職員は幸せな立場にいる。私たちは、持ちうる「データ」と生ものとしての「実際・実態」というふたつの事柄どうしを、常に対話させる必要がある。このふたつを対話させることができるのも、やはり私たち現場の教職員しかいないのである。

私たちが「主観」におぼれかけたとき、「とっとり学調」は強力な「客観」として私たちを支えてくれるであろう。
[令和6年度 学力向上検討会議発表資料 (P.28) より一部抜粋]

「データ」と子どもの「実際・実態」とをつなぎ解釈すること、そしてそれを基に、個や集団に応じた取組や支援を創出すること。本報告でも紹介してきたこれらのプロセスは、まさに現場の教職員にしかできないことである。これは、学校現場におけるEBPMの肝となる部分と言えよう。そのプロセスの精度を上げていくためにも、現場の教職員には、データと子どもをつなぎ、深掘りしていくだけの確かな「見取りの力」と、個や集団に応じた様々な取組を創出できるだけの「引き出しを増やしていくこと」が一層求められる。

現場の教職員にしかできないこと、そこに「教育のプロ」としての自覚と誇りをもって取り組んでいくことが重要である。

打吹小学校の取組は、そうしたことを改めて伝える好事例であり、多くの学校が参考にし、取組の充実につなげていかれることを期待したい。

客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進
【「とっとり学力・学習状況調査倉吉市プロジェクト」—倉吉市立西中学校の事例】

1 はじめに

本プロジェクトでは、とっとり学力・学習状況調査（以下、とっとり学調）のデータをどのように学校経営へ活用していくかということについて、学校、倉吉市教育委員会、県教育委員会が一体となって共同研究を進めている。具体的な取組や検証について、本稿では倉吉市立西中学校の取組の概要を報告する。

2 これまでの取組

西中学校では、「人間力を育てることが学力の伸びにもつながっていく」という仮説をもとにした学校経営が行われており、その検証にとっとり学調のデータを活用してきた。「『型』を身につける指導が力を伸ばすための土台となり、つながりと感動のある学校行事と主体的な生徒会活動を通して、生徒の主体性や自己肯定感が高まり、学力が伸びた。」として、成果につながったと考えられる具体的な取組を昨年度の報告書で紹介したところである。



令和5年度の
報告書はこちら

【令和5年度とっとり学力・学習状況調査報告書 倉吉市立西中学校の事例】
「今後さらに学力を伸ばしていくために（今後の取組の方向性）」

①授業改善

- ・教師主導による一斉指導からの脱却を目指す。→ 生徒が主体となり、かかわり合い、生徒が自ら学び取る授業へ
- ・協同学習の理念のもと、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。

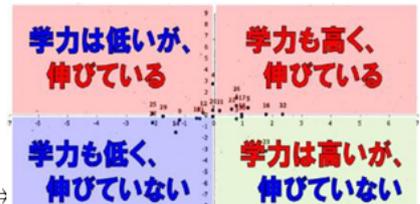
②「水曜会議」で個票を効果的に活用

不登校対策として毎週水曜日に各学年団で行っているこの取組の中で、【帳票40】「学力分析データ（学力のレベル・伸び・学習方略・非認知）児童生徒別」を活用して各生徒の状況を把握するアセスメント的活用の可能性について提案する。

③伸びている生徒の傾向をつかむこと

1月に実施された職員研修の際、【学校分析シート】「今年度の学習状況（学力の伸びと学力値）【※】」を活用して、以下の2点について各学年団による分析・考察が行われた。

- (i) 学力が伸びている生徒の傾向にはどんな特徴があるか。
(特に、学力は低い伸びている生徒は、どういう生徒か。)
- (ii) 教師は、その生徒にどのようなアプローチをしたか。



※プロット図を基にした分析 ⇒

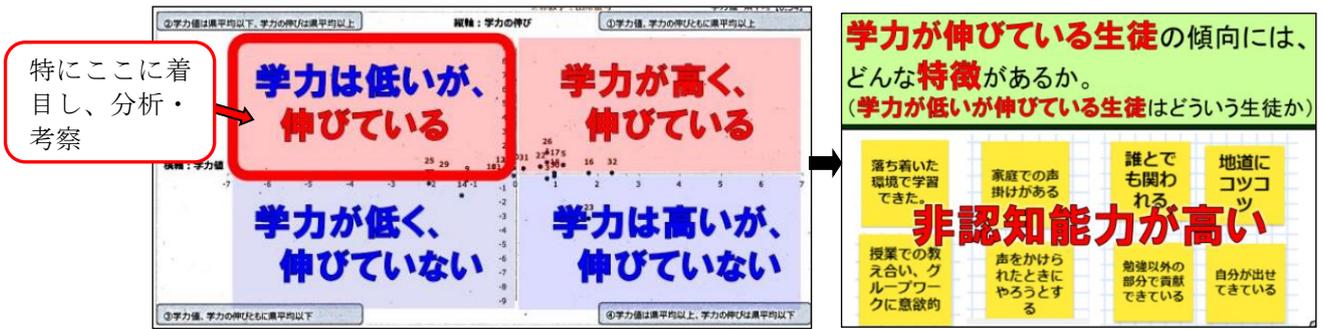
ここで得られた情報をもとに、「伸び」に着目したさらなる仮説検証のサイクルが今後動き出していくことになる。

この方向性をもとに、さらに学力を伸ばしていくために、令和6年度は次の取組を行った。

3 令和6年度の取組

(1) 伸びている生徒の傾向分析

【学校分析シート】「今年度の学習状況（学力の伸びと学力値）」を活用し、学力が伸びている生徒（特に、「学力は低い伸びている生徒」）の特徴と教師のアプローチについて学年ミーティングを行った。データと教師側の見取りをもとに「学力は低い伸びている生徒」に着目し分析・考察をすると、「誰とでも関わることができる」「地道にこつこつと取り組む」「授業での教え合い、グループワークに意欲的」などの特徴があり、傾向として非認知能力の高い生徒が学力を伸ばしていることが分かった。



(2) 非認知能力に着目した授業改善

授業の中で、協働的な学び合いを通して非認知能力を育むことで学力は向上するという仮説のもと、全校で以下の取組を行っている。

①「西中めざす授業の姿（10の視点）」をもとにした協同学習の実施

今年度は、「学びたくなる学習課題の設定」と「協働的に課題を解決する活動の設定」を重点項目とし、生徒が課題意識をもち、自分たちの力で解決（達成）することを通して、生徒が主体となり生徒自らが学びとる授業づくりを意識している。

西中めざす授業の姿（10の視点）

- ①【興味関心】を引き出す導入の工夫 For starters, do attract students' interest
- ②生徒への【本時の流れ】の提示 Show the flow of the class to the students
- ③学びたくなる【学習課題】の設定 Show the main idea of the lesson
- ④学習課題を【めあて】として提示 Show the main expressions of the lesson
- ⑤明確な表現での【評価基準】の提示 Explain the grading system
- ⑥【学習規律】（メリハリ）の徹底 Make the rules clear
- ⑦生徒の学びが深まる【ICT】の活用 Use the ICT to deepen students' learning
- ⑧【個人での思考場面】の設定 Emphasize thinking independently
- ⑨【協働的に課題を解決する活動】の設定 Doing activities
- ⑩成果を検証し次の意欲を高める【振り返り】の実施 Reflect on the lesson

重点項目 ③・④

生徒が主体となり、生徒が自ら学びとる授業

『先生に教えてもらうのではなく、クロムブックや教科書など、自分の言葉でアウトプット(説明)し合うことで、学習の質が高まり、学びが定着』

②「授業で身につけさせたい子どもの姿（行動指標）」（具体的な教師の手立て・しかけ）の設定

年度初めの研修で、「学校行事はもちろん、授業の中でも非認知能力はねらいをもって育てていくことができる」ということを全職員で確認した。そこで、職員で協議し、学校独自で「自己効力感」「やりぬく力」「向社会性」「勤勉性」「自制心」に照らし合わせて「授業で身につけさせたい具体的な子どもの姿」と「具体的な教師の手立て・しかけ」を作成し、育てたい非認知能力を授業の中に具体的に落とし込んで授業実践を行っている。

授業研究会においてもこの行動指標を指導案に反映させ、非認知能力を育む取組はどれほどできているかを見取り、必要な取組や手立てについて協議を行っている。

授業研究会のねらいと授業参観の視点より

① ねらい
私たち教師は、どのようにして協働的な学び合いのある授業づくりをしていくのか、どのようにして非認知能力を育てていくのか、その必要な取り組みや手立て、支援を考える。

② 授業参観の視点

- (1) 本時の学習課題は、「学びたくなるもの」になっていたか
 - ・どうしてこの課題をするのか価値づけができてきているか
 - ・この課題をすることで、どのようにゴールにつながるのか伝わっているか
 - ・何ができれば良いのか、着地点を示すなどの意欲づけができてきているか
- (2) 本時の活動は、「協働的に課題を解決するもの」になっていたか
 - ・教師の「教え過ぎ」がまんして、課題解決を子ども自身にさせているか
 - ・課題解決に向けて、まずは「個でやってみる」時間をとっているか
 - ・個で考えたことを交流、共有することで、自分の考えが深まっているか
- (3) 本時の学習で、非認知能力を育む取り組みはどれほどできていたか

重点項目 ③

重点項目 ⑨

4 授業で身につけさせたい子どもの姿（行動指標）

自己効力感	やりぬく力	向社会性	勤勉性	自制心
<ul style="list-style-type: none"> 「自分はいまどう」という考えをもち、自分で考えている 間違ってもいいかまはらずやってみようとしている 「できた」「わかった」という達成感を味わっている 学習した基本的な内容はたいへん理解できている 	<ul style="list-style-type: none"> 難しい問題であっても、チャレンジしている 失敗しても途中でやめず、別の方法を模索している 自分で決めた目標に向けて努力を続けている 時間がかかっても最後までやりとりにしている 	<ul style="list-style-type: none"> 困っている人を見たら、さそいよんでいる 自分が考えたことを周りに伝えていく 授業中の疑問に対して、声をあげて質問している 「わからない」と仲間と一緒に考えている 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の出した課題は、きちんとやっている 授業のルールを守って取り組んでいる 自分のやるべきことに専念できている 「ゴール(タスク)」に向けて計画的に取り組んでいる 	<ul style="list-style-type: none"> 授業に必要なものを忘れずに持っている 必要に応じて整理している 必要に応じて自分の課題をコントロールできている

具体的な教師の手立て・仕掛け

<ul style="list-style-type: none"> 目標の内容や家庭学習とのつながり大いに導入 学習課題(着地点・ゴール)との繋がりがわかる意欲づけ スモールステップによる発展的な学習(達成体験) 仲間からの声援・見え 	<ul style="list-style-type: none"> 目標を自分で設定させ、達成できる(達成体験) 努力の過程を具体的に認め、励ましをする 授業とつながっている家庭学習の大切さを伝える 仲間からの声援・見え 自分の考えを深める 	<ul style="list-style-type: none"> 「まず自分で」時間を確保している すべての子どもが参加する機会をみえている 教え過ぎによる学習の邪魔をしない 深い人間関係の築き 「失礼の言葉」 	<ul style="list-style-type: none"> 互利になる適切な量の課題を配している 授業とつながりがある家庭学習の工夫 困ったことが解決につながる体験 どうして思うのか理由を伝える 	<ul style="list-style-type: none"> 授業での約束を守らせる がんばろうとしている姿を認め、励ます 自分の気持ちや自分の言葉で支えあっている どうして思うのか理由を伝える
--	--	--	--	---

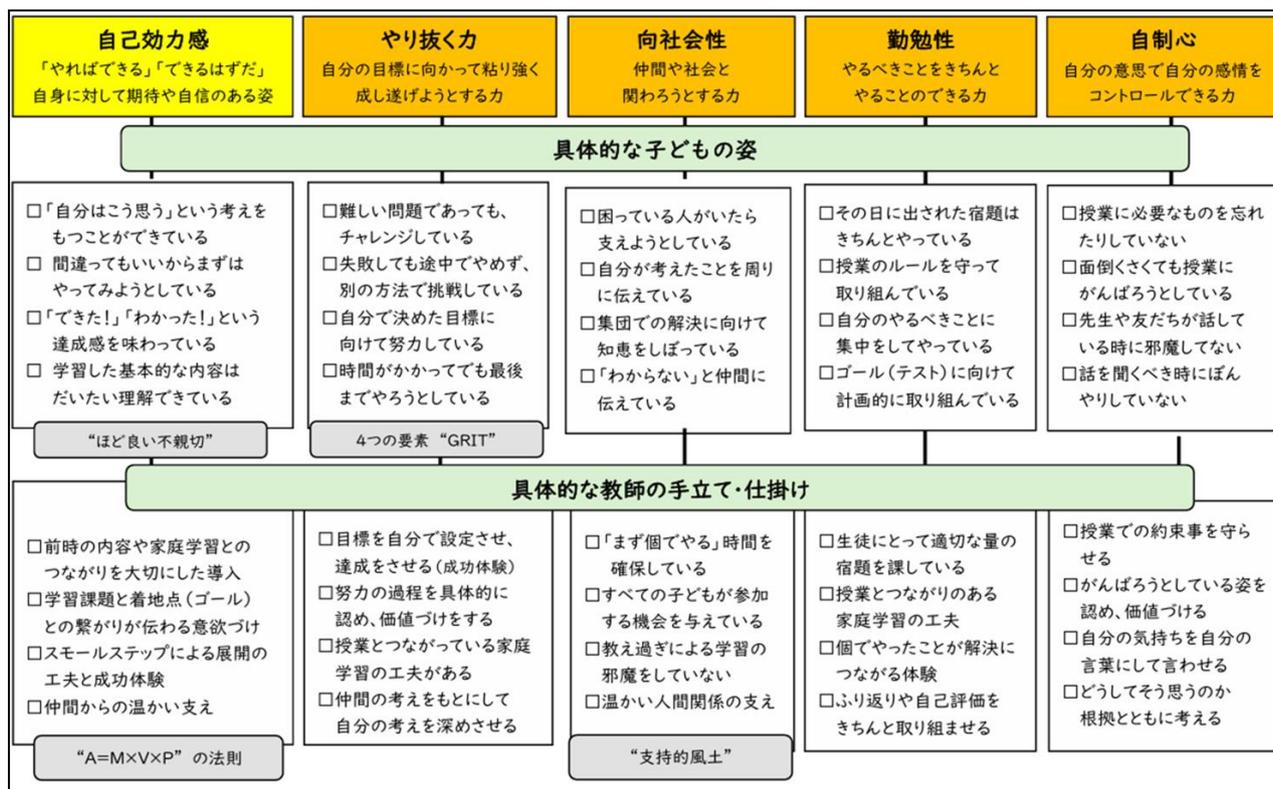
(3)この授業で育てたい非認知能力と、それを達成するための工夫

- ①やりぬく力…教材の種類に幅を持たせることで、「分からなかったから何もできない」ではなく、様々な方法を試し、課題達成のために最後まで取り組めるようにする。
- ②向社会性…ネームプレートを活用し、「誰がどの難易度に取り組んでいるのか」が分かるようにし、それを参考にしながら教えに行く、教えてもらいに行く、など生徒間の学習を活発にしていく。また2人以上(別の問題を解いている人)にサインをもらうという具体的な設定をし、様々な仲間と交流できる機会を設けている。

(4) 学習過程

学習の流れ	生徒の活動・思考	留意点(・) 支援(◎) 評価(◆)
1.めあての確認(1分)		
1年生で学んだ図形の作図方法を合同な図形の性質を用いて証明することができる		
2.前時の復習・本時の要		・証明をする上で大切な点を伝える(仮定と結論)
3分		

倉吉西中が今年度作成した「授業で身につけさせたい子どもの姿（行動指標）」



③非認知能力アンケートの作成・活用

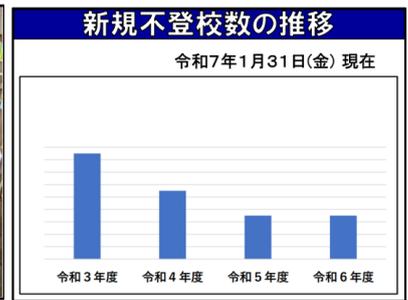
生徒の非認知能力の変化や変容を、より短いスパンで具体的に捉えるため、「【西中版】非認知能力アンケート」を独自に作成し、学期に1回実施した。その結果を分析して実態の把握や授業改善に生かしている。今後は、県の非認知能力等調査アプリ「見え〜る」も活用しながら授業改善につなげていくことを考えている。

「【西中版】非認知能力アンケート」より	
「自己効力感」についての設問	
1	友達や先生にすぐに答えなどを聞いたりせずに、自分の考えをもつようにしている。
2	問題を解いたり、活動をするときには、間違ってもいいからやってみようとしている。
3	授業では、「できた!」「わかった!」という達成感を味わっている
「やり抜く力」「向社会性」についての設問	
5	難しい問題であっても、あきらめたりせず、チャレンジしている
6	失敗しても途中でやめたりせず、別の方法でやってみようとしている
7	自分で決めた目標に向けて、努力をしている
8	時間がかかっても最後までがんばろうとしている
9	授業中に困っている人がいたら、声をかけたりして、支えようとしている
10	自分が考えたことを友達や先生に伝えている
11	グループやペアで問題を解決しようと、一緒に頭を悩ませたりして知恵をしばっている
12	分からない問題があったとき、それをそのままにせず、「分からない」と伝えている

(3) 一人一人を大切にしている指導

①「水曜会議」での個票の効用

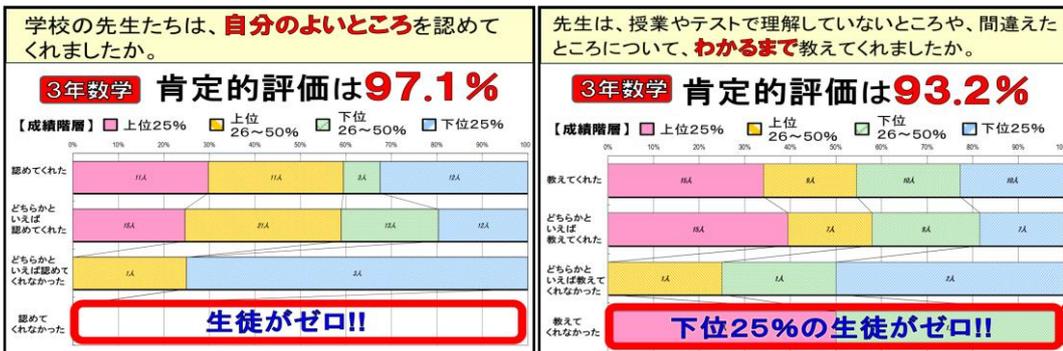
「水曜会議」の詳細については昨年度の報告書に掲載しているが、不登校対策として毎週水曜日に行っているこの会議で、【帳票40】のデータを生徒理解に活用し、課題解決に向けた具体的方策について話し合っている。生徒一人一人の変化に気づき、寄り添い、大切にしている支援が新規不登校の減少につながっていると考えられる。



②個別支援の充実

学力を伸ばした生徒の割合に着目し、伸びた要因を分析した。可能な範囲で授業をTTで行い、一人一人の生徒に丁寧にかかわることにより、低位の生徒もあきらめずに落ち着いて学習に取り組むことができたことが伸びの一つの要因ではないかと考えられる。TTを行っていない他の教科の授業でも、一人一人に寄り添った指導が行われており、安心して学ぶことができる環境づくりが非認知能力の高まり、学力の伸びに影響していると考えられる。

このように、学校生活の様々な場面で教師が生徒一人一人に寄り添い支援することを大切にしていることが成果につながっており、アンケート結果から生徒もそれを実感していることがうかがえる。とっとり学調で大切にしている「一人一人の伸びをしっかりと見ること」を全職員が共通理解し取り組んでいることが、「学力向上」と「不登校の未然防止」につながっていると考えられる。



特に、下位の生徒が教師の丁寧な関わりを実感していることが明らかになった。

4 終わりに

西中学校では、とっとり学調のデータから生徒の伸びの状況や特徴的な傾向を把握し、伸びの要因等について分析・考察を行い、目指す学校像の実現に向けて分析したデータ結果を活用し、その後の方向性や具体的な施策につなげていこうと取り組んできた。

とっとり学調は他の検査や調査では見取ることができない一人一人の伸びや伸びた理由を明確につかむことができ、取組を行ってきた職員の大きな自信につながった。また、これまで大切にしてきたこととデータとの関連から、「強みを生かして学校経営や学級経営を行うこと」や「一人一人をしっかりと見取り適切に支援することが学力向上や不登校の未然防止につながる」ということが明らかになった。さらに、育てたい非認知能力を授業の中に落とし込み、授業改善につなげたことも今年度の大きな成果であった。

取組とデータをもとにした分析・考察から、人間力（人柄・人間性）の育ちと学力の伸びとの関連についての知見が蓄積されつつある。さらに、令和7年度に向けて分析結果をもとに生徒の主体性を伸ばすためのプロジェクトを立ち上げるなど、今後の学校の新たな挑戦にも注目していきたい。



客観的な根拠を重視した教育政策（EBPM）の推進
【岩美町教育委員会等の取組】

1 令和5年度の戦略会議で挙げた研究テーマ

- ・児童生徒の「学力の伸び」の違いには、何が関係しているのか。
 - ・非認知能力、学習方略を高めるためには、何に重点をおいて指導していくとよいのか。
 - ・どのような教育施策が、伸び続ける児童生徒の育成に効果があるのか。
 - ・「10才の春、15才の春」に向けて小中連携で何に取組んでいけばよいのか。
- ※このような視点をもって、推進チーム会議で協議し、学校訪問を行った。

2 具体的取組の記録

(1) スケジュール

日にち	内容	参加者
4月22日（月）	第1回戦略会議 ・現状についての情報共有 ・研究についての協議	・町教委 ・県教委
5月22日（水）	第2回戦略会議兼地方教育アドバイザーによる町教委及び学校訪問 ・岩美中学校訪問 校長面談、授業参観等 ・岩美町教委員会訪問 現状についての情報共有 取組についての協議	・町教委 ・県教委 ・学校 ・地方教育アドバイザー
6月4日（火）	岩美町・倉吉市活用協力校連携 ・活用協力校の校長による調査結果をもとにした対話	・町教委 ・市教委 ・県教委 ・学校
8月1日（木）	令和6年度岩美町教育研究会研修会地方教育アドバイザーによる学校訪問 ・岩美中学校訪問 ・とっとり学力・学習状況調査に係る研修会	・町教委 ・県教委 ・学校 ・地方教育アドバイザー
10月18日（金）	第3回戦略会議 ・令和6年度調査結果をもとにした協議及び取組について	・町教委 ・県教委
11月8日（金）	岩美町プロジェクト会議 ・岩美中学校との協議 令和6年度調査結果をもとにした協議	・町教委 ・県教委 ・学校
11月27日（水）	第1回岩美町チーム会議 ・学校担当者との調査結果分析	・町教委 ・県教委 ・学校
12月2日（月）	第2回岩美町チーム会議 ・各学校長との協議	・町教委 ・県教委 ・学校
1月17日（金）	岩美町・倉吉市活用協力校連携 ・活用協力校の校長による調査結果をもとにした対話	・県教委 ・学校
12月、3月	岩美町立小学校訪問 ・令和6年度調査結果をもとにした協議	・町教委 ・県教委 ・学校

(2) 令和6年度岩美町教育研究会研修会

岩美町内の全小・中学校合同で、とっとり学力・学習状況調査の活用について研修会を実施した。地方教育アドバイザーや鳥取県教育データ活用アドバイザーを講師として招聘し、とっとり学力・学習状況調査の意義や教育データの活用について研修を行った。最後に各学校の取組について協議した。

(内容)

- ・講義「スクラム教育とコミュニティ・スクールを最大限に活かすために」

文部科学省総合教育政策局地域学習推進課法規係
岩美町地方教育アドバイザー 藤野 萌子 氏

- ・講義「とっとり学力・学習状況調査の意義について」
文部科学省大臣官房人事課 人事企画官 (併) 副長
岩美町地方教育アドバイザー 大江 耕太郎 氏

- ・講義「教育データの活用について」(オンライン)
文部科学省大臣官房人事課計画調整班専門職
鳥取県教育データ活用アドバイザー 大井 康平 氏

- ・協議・発表「今後の取組について」



(3) 岩美町チーム会議の取組

①とっとり学力・学習状況調査の分析

令和6年度の調査結果をもとに、各学校の結果の伸長につながったと考えられる取組や、今後の取組の方向性について意見交換を行い、町内の各学校で取り組むことについて協議した。

②各学校長との協議

鳥取県教育委員会からとっとり学力・学習状況調査についての説明後、とっとり学力・学習状況調査の活用や学校の現状について意見交換を行い、学校を超えた取組について協議を行った。

(4) 岩美町学校訪問

岩美町教育委員会と県教育委員会が岩美町内の全学校の結果を把握し、各学校におけるとっとり学力・学習状況調査の結果の活用状況や学校経営にどう生かしていくか、調査結果をもとにどのような取組に力を入れていくか等について各学校管理職及び担当者、岩美町教育委員会、県教育委員会で協議した。

○協議例：(分析シートと実際の見取りによる分析から)

- ・全体的に認知的方略は向上した。何をほめるか具体化したり、授業の中でやり取りをしたりした結果と推察
- ・学習に向かえるようになったが、下位層が多いため、3学期は習熟の充実を図る。

3 成果と課題

(1) 成果

- 岩美町教育委員会と県教育委員会がチームとなり、調査結果の分析をすることで、課題を共有し、その対策について協議することができた。
- 小学校と中学校がそれぞれ持っているデータを共有し分析することで、中学校区内の小中連携を充実させることができたと考える。
- とっとり学力・学習状況調査結果をもとに学校の実態について協議することで、客観的に状況を把握したり、取組の成果を検証したり、改善の方向を検討したりすることができた。

(2) 課題

- 県、町教育委員会や学校の分析だけでなく、大学等と連携したアカデミックな分析を基に、どのような児童生徒が伸びているのか、どのような教育施策が児童生徒を伸ばしているのかについて知見を創出していくことが、今後の教育に必要であると考えます。